

祇園祭から学ぶ 着物、ならびに浴衣の普及

9班メンバー

西道 奎 (京都大学総合人間学部3回生) 佐野 樹 (Kistory, 京都大学経済学部2回生) 川相 帆風 (Kistory, 京都大学工学部2回生)
内藤 圭梧 (Kistory, 京都大学工学部2回生) 神永 勉 (カミーズ・トップ株式会社 代表取締役)



なぜ祇園祭から着物？

私たちは班員全員が着物に関する活動やビジネスを行っており、普段から着物の普及に尽力しています。今、世間では浴衣ブームと言われていますが実際のところ浴衣を着る人は年々減少し、着物に至っては年配の方しか着ていません。そんな中、毎年の祇園祭では若者たちが根強く浴衣を着て参加しています。そこで、祇園祭を通して観客が長年浴衣を着ている理由を当時の写真資料や鉾町の中心となっている呉服屋への取材から考察しました。さらには、そこから学んだ持続可能性の秘訣を今後開催するイベントで活かすことを目的とします。



調査方法

8月 文献調査 (参考文献略) 9/4 丸池藤井株式会社への取材

内容・結果

■ 文献調査

祇園祭の過去の写真資料や文献から、祇園祭の観客の服装の変遷を追い、そうなった原因を社会背景と照らし合わせて考えました

i) 浴衣の誕生 (江戸時代)

そもそも、浴衣が登場し、庶民によって着られるようになったのは江戸時代です。初めは湯上りの湿気取りに使われました。染色技術の向上に伴い、外出でも着ができるようになると、この浴衣を祭りで着ることがブームとなり、祇園祭も例にもれず浴衣客であふれました。

ii) 洋装の登場 (明治・大正時代)

普段着として洋装が登場するとこの光景は大きく変化しました。祭りでも洋服を着る観客は増えていき、浴衣は地元住民が着て参加する程度に減少します。つまり、現在の祇園祭の光景は古くからのものではないのです。

iii) 浴衣ブームの到来 (平成)

長い間、一部の人が浴衣で楽しんでいた祇園祭ですが、転機が訪れます。2007年、全国的な浴衣ブームが到来しました。アパレル業界に着物浴衣が進出し、多くの人が浴衣で祇園祭を訪れました。この頃の大ブームは落ち着きましたが、今なお祇園祭には浴衣を着ていく人が絶えません。

考 察

■ 浴衣が祇園祭で着られ続ける理由

文献調査から、現在みられる浴衣客の数は10年ほど維持されてきたことが分かります。これはかつてのブームの名残には違いありませんが、祇園祭に関わる呉服屋の貢献もあるようです。祇園祭の浴衣客増加は呉服屋、小売店にとって直接利益につながることなので、彼らも尽力するのでしょう。

■ 呉服屋が祇園祭に協力し続ける理由

祇園祭が持続してきた理由は言うまでもなく、町衆の情熱です。これこそ応仁の乱で途絶えた祇園祭を復興しその後500年間祇園祭を支えてきました。ですがそれだけを理由にはできません。インタビューから分かるように、呉服屋は祇園祭中の営業によって利益を得ることで協力を続けられるようです。出資額に対する採算が採れずとも経済的に最低限メリットがあることは、物事の持続に大いに貢献します。

提 言



祇園祭を支え、維持してきたのは情熱と、そして最低限度の経済循環です。これはSDGsでいえばNo.8「働きがいも経済成長も」が最も近いですが、少しニュアンスが違うようにも感じます。SDGsがグローバルな視点であるのに対し、今回の調査から得られた示唆はもっと地域的かつ控えめなもののように思います。祇園祭を含めあらゆる物事の持続に必要なのはまずは「情熱」。そして、経済成長などという大仰でなくとも、双方に最低限の経済的メリットがあること、つまり、せっかくの情熱を経済状況が妨げることのないよう工夫することだと考えました。名づけるなら、SDGs No.8.5「持続可能な経済循環」です。